

## 私たちの想い

### ～定原たず子さん 加計呂麻渡航～



11月8日（火）、待ちに待ったたず子さんとの日帰り加計呂麻旅行の日。天気は11月と思えないポカポカ陽気でした。振り返ると、私が初めてたずさんの自宅に行ったのは12年前の8月。その時はお母さんも健在でたずさんもとても元気でしたので、フェリーで加計呂麻に渡り、バスで自宅のある勝能（かちゆき）まで移動しました。「お家の場所はたずさんが教えてくれるはず。」と先輩方に教えられた事、フェリーやバスの中でたずさんを知る方々に会い、「たずちゃん、お母さんに会いに来たの？」と声をかけられた事が、ついこの間のようです。バスから降りると、たずさんはお母さんの待つ自宅へちゃんと案内してくれました。その後も、何度かたずさんと一緒にお母さんに会いに加計呂麻に行き、一度は帰りのバスに乗り遅れるというハプニングもありました。

そして最後に自宅に帰ったのが、7年前の8月。その時はたずさんがフェリーやバスでの移動が難しくなってきた事もあり、当時の担任の徳支援員が海上タクシーを手配し、少しでも安心して移動できるようにと徳支援員と私が同行し自宅近くの棧橋まで海上タクシーで移動しました。自宅に着くと、前の年にお母さんが亡くなり、姉の姿しかなかった為か、部屋の中をキョロキョロと見回したたずさんの姿を思い出します。

そんなたずさんも年を重ね、歩行や視力などのほかにも健康面で気になるところが出てきている中、「あと1回、お家に帰れたらいいね・・・」という私たちの願いが、いつの頃からか、「あと1回はお家に連れて帰りたい！」という強い想いに変わっていきました。強い想いに変わっていく中、たずさんの体調面や天気だけでなく、コロナ禍という事で外出するタイミングが益々難しくなってきました。さらに今年の夏は、たずさんの元気が少しなくなった事もあり、今の体調では無理かも・・・と一時は諦めかける私がありました。しかし、女性支援員の細やかな支援のおかげで、たずさんの体調も落ち着き、この日を迎える事ができました。

車椅子での生活になっているたずさんを公用車に乗せ、そのままフェリーに乗り込み、私の記憶を頼りにいざ加計呂麻へ。担任の恵なつえ支援員と私は、責任重大です。いろいろな事を想定し恵支援員が必要な準備をしてくれました。加計呂麻に着くとトイレを済ませ、いよいよ勝能へ。もちろん、車内で流れる音楽はたずさんの好きな森昌子です。自宅近くの公民館の前の木陰で昼食の弁当を食べ、私が先に自宅までの道が車椅子で行けるのか？自宅の場所があるのか？確認した後、散歩しながら自宅へ向かいました。自宅前へ着き、「たずさん、お家だよ。」と言うと、現在は誰も住んでいない自宅を見上げ、確認したように見えました。自宅前や近くの海、私がたずさんに案内してもらった小道の前で写真を撮り、上天気の中、たずさんと行く日帰り加計呂麻旅行が実現できました。

私たちにもいろいろな思い出があるように、利用者さん一人ひとりにも懐かしい場所や大切な場所、そして沢山の思い出があると思います。自宅へ行き、風の匂いや波の音など、何かたずさんが感じてくれていたら嬉しいです。「あと1回、お家に連れて帰りたい！」たずさんが元気でいてくれる事で、長年の私たちの願いが叶いました。（記事：大田）

